

古絵図から読み解く「江戸時代の福部」

石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代 江戸時代 明治時代 大正時代

江戸時代の中頃は福部の面積の10%以上が「砂丘と池」・360年前の地形



縄文時代が終わり弥生時代になる頃には、海面が下がり始め（弥生海退*¹）この頃海の開口部を徐々に塞ぎ、内海*²であった所は潟湖*³となる。

現在の砂丘地周辺では、海底に沈んでいた砂地が地表に現れて風により、激しく飛砂*⁴が生じるようになり始める。

長く内海に暮らしていた縄文人は飛砂の厳しい環境を避け、細川池南域（高江・箭溪・栗谷・蔵見・海士周辺）が塩見川や箭溪川などの川で埋め立てが進む扇状地・平野へと撤退したものと考えられる。

弥生時代以降は、稲作などの農耕に適した平野部を求めて移動し、弥生人が増えて行く。

栗谷古墳群、蔵見古墳群、箭溪古墳群、高江古墳群、海士古墳群など発掘された遺跡の数や土器の技術などからして、明らかに文化の中心が海岸部から平野部へと移動したことが分かる。

弥生時代になると、稲作が行われるようになり人々の生活の場は大きく広がっていった。

しかし、縄文時代の先進地であった福部も内海というその地理的環境が稲作りに適さなかったためか、青谷上寺地遺跡のような他地域に見られるような大規模な集落の発生は見られなかったようである。

* 1 弥生海退：縄文時代中期後半以降、気候が寒冷化し海岸線が徐々に後退し始めた。

* 2 内海：陸地と陸地との間に挟まれ、狭い海峡によって外洋と繋がっている海。

* 3 潟湖（せきこ・かたこ）：（湾が砂州によって外海から隔てられ湖沼化した地形。

* 4 飛砂：海岸に堆積した砂浜などの砂が風によって移動する現象。